

## 経営史を学び教えること

井澤龍 Ryo Izawa  
滋賀大学 経済学部 / 講師

2015年8月に滋賀大学経済学部にて奉職することになり、約1年が経ちました。学生の質の高さ、教職員の方々の温かさにまず感謝の気持ちを伝えるとともに、私が受け持つことになった「経営史」という科目について思いを書き綴りたいと思います。

滋賀大学というのは、経営史家にとって名門の大学の一つといってよいでしょう。これはどのようなことをいっているかという点、日本において経営史学会が旗揚げされた場所の一つが、滋賀大学だからです。これを滋賀大学経済学部60年史である『陵水六十年史』で確認しましょう。「ただ惜しむらくは、いずれ(筆者補:の学会)も関西とか近畿と範囲を限定した小集会であって、三十六年五月の社会経済史学会全国大会が唯一の全国規模の大会であった。(中略)この社会経済史学会全国大会の際、一部の学者から教室の一時的利用が申込み、大会の最中に別の相談会がもたれたが、これが経営史学会誕生となって結実するのである。経営史学は戦後俄かにその存在が認められ、アメリカではいち早く市民権を獲得していたが、わが国でもさほどの遅れをとらないでここに誕生したのであって、その産室がわが経済学部の木造校舎の一室であったのである」(169ページ)。これは、経営史学会が、発足後20年に発刊した『経営史学の二十年』からも確かめられることであり、滋賀大学での出来事が「日本における経営史学の確立にとって画期であった」(343ページ)という評価が与えられています(とはいえ、経営史学会の設立にあたって、あくまで滋賀大学は重要な場所の「一つ」であったことは注意しなければなりません)。

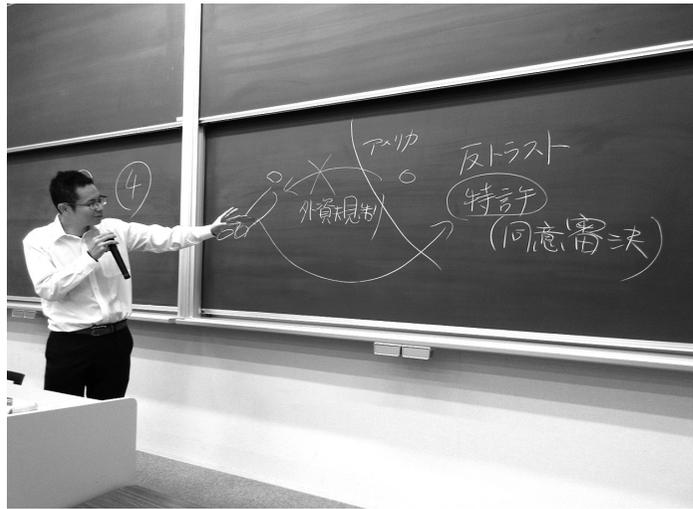
しかし、過去のことは過去のこと。歴史を学ぶ必要性とは、過去を崇め奉ることにあるのではなく、変わらぬものが何であり、変わるものが何であることを理解しようと努める訓練をすることにあるはず。そして、こうして私が書いている文章を、日本国という場所に生まれ育ち、教育を受けたものであるならば理解でき

ると仮定できること自体、せいぜい100年のことにすぎないのですから、変わらないものの方が少ないようにみえます。それでは、過去ないし伝統とは抜きに、経営史を学ぶことにどのような意味があるのでしょうか。

経営史を学ぶことの意義の一つは、まず過去、伝統の強さを理解することにあるでしょう。私が、前々段落で書いた日本における経営史と滋賀大学との関係について、もしかしたら(そう薄らと願うのですが!)、その過去を述べただけで、滋賀大学で経営史を学ぶことについて納得していただける人がいるかもしれません。もし、そうだとしたら、それは何を意味しているのでしょうか?それは、過去あるいは伝統と呼ばれるものの強さです。今までにやってきたこと、それはそのみで何かを説得し、物事の進路を決める材料となりえます。あるいは、もう少し、経済学的にいえば経路依存性(path dependency)という言葉になるでしょう。我々は、過去に制約されながら意思決定しているのだということは否定できない事実のはずです。

過去の強さを理解したら、その後、何に注意を払うべきでしょうか?それは、過去にあったとされるものを悪用し、利益を引き出そうとする人間たちの存在です。あるいは、そこまで悪質でなくとも、神話を無批判に受けいれている我々の姿勢そのものです。例えば、教科書等でも採用されるようになってきた「いわゆる『鎖国』」論などを想起すればよいでしょう。鎖国の文言に引きづられ国を完全に閉ざしていたと捉えられがちであった江戸期の日本について、長崎、対馬、薩摩、蝦夷の四つの外国に向けて開けられた窓口があったことから全く国を閉ざしていたわけではないとの見解が徐々に浸透しており、歴史観の変化が起こっています。そして、「鎖国論」から「いわゆる『鎖国』論」への変化は、日本と外国との関係を述べる際に、鎖国していた過去があるため、日本人とは何々であるという言説を不可能にするでしょう。

結局、我々は過去に縛られながらも、一方で変化も



また絶えず行っていなければならないのだと考えます。もし変化を拒んでいるものが伝統であるとしたら、そして、その伝統が偽のものであったり、あるいは、伝統とされるものが作られた際には意図されていなかったものが伝統となっていたりしたら、我々は、その歴史を手に入れるだけで変化を選ぶことが可能になります。

しかし、変化を選ぶにも、現状維持を選ぶにも、歴史学の知見だけでは十分でない気がします。我々を指針付けるためには、経済学も、経営学も、法学も、文系学問も理系学問も必要でしょう。これらとともに、歴史学もあり、歴史系の中でも、経営学、経済学（特に組織の経済学、産業組織論ですが）、法学、工学などと接合的な経営史があるのです。好き嫌いはあるでしょうし、得手不得手はあるでしょう。しかし、好きなこと得意なことばかりに閉じこもってばかりはいられません。外に晒されてはじめて、好きなあるいは得意な領域を他の人間との連携を意識して伸ばすという選択肢が出てくるでしょう。あるいは、満遍なく物事を知りたいという要求も出てくるのでしょう。そうでなければならぬと私は考えます。そして、その場を作り上げている滋賀大学経済学部を改めてよい場所だと感じます。

抽象的な話がすぎました。具体的に私が担当する「経営史総論」では、いわゆる新制度派経済学の知見を基礎としながら、企業が、技術、自然環境、事件、制度、市場といった要素にどう影響を受けて、あ

るいは与えながら発展していったのかを、映像教材等も用いながら授業をしています。扱う期間は、産業革命前の17世紀ごろから現在を扱っています。「外国経営史」では、基礎的な経営学の理論を学びながら、10個の産業（自動車、電機、化学、医薬品、繊維、鉄鋼、商社、生活用品、銀行、生命保険）の形成から現代までの歴史を眺め、有用と思われる事例については、ケーススタディ編としてより深く議論を行い、理解を深めようと試みています。2016年春学期に担当した「大学入門セミナー」では、大学で学ぶとは何かということ話をした後、後半の回では、興味のある企業家について2人1組となってプレゼンし、その企業家について紹介、そして他企業との比較、同時代的な文脈の観点から批評してもらいました。生徒が自主的に選んでくれた企業家は、松下幸之助（パナソニック）、本庄正則（伊藤園）、孫正義（ソフトバンク）、古森重隆（富士フイルム）、三木谷浩史（楽天）、藤原秀次郎（しまむら）、井深大、盛田昭夫、出井伸之（ソニー）、スティーブ・ジョブズ（アップル）でした。

授業、セミナーを行って分かるのは、ありきたりな感想なのかもしれませんが、私もまた多くのことを学び教えられることばかりということです。しかし、驚きっぱなし、甘えっぱなしではいけないでしょう。私と関わった方々にとって少しでもプラスになるものが提供できるように研鑽し、滋賀大学で学び教えていく所存です。